

「外国につながる子ども」だった私が実践者になる時

— 複言語複文化間に生きる若者が主体的な自己を
創出する実践を目指して —

林 錦園

要 旨

本稿では、「外国につながる子ども」だった筆者が子ども・若者の日本語教育に関わる実践者になったその経緯、及びこれまで受けてきた日本語教育の養成教育によって形成された実践観について述べる。そのうえで、筆者が横浜市の「なか国際交流ラウンジ」にて取り組んできた実践「外国につながる若者支援プロジェクト」をもとに、専門家教育と実践の結びつきについて考えたい。

キーワード

「外国につながる子ども・若者」 複言語複文化 主体的な自己 ことばとライフ

1. 「外国につながる子ども」だった私が「実践者」に

ここでは、まず「外国につながる子ども」だった筆者を振り返ってみたい（以下は筆者の回想の語りとなるため、私で表す）。

2009年、中学2年生だった私は仕事の関係で先に来日した母と一緒に暮らすために、中国から日本に来た。横浜市のある公立中学校に編入し、私は「外国人」として、そして「外国につながる子ども」として日本語を学び始めた。中学校にいる毎日は国際教室で日本語を勉強し、在籍学級でほうっとし、日本語の不自由な私は声を奪われ、手足を縛られる人形になってしまった。日本語ができないことイコールことばがない、それは私が学習者として経験した最初の日本語教育実践であった。周囲の大人も私自身も、「外国につながる子どもだから」と当たり前のことだと受け入れていた。「中国にいる同級生と比べては落ちこぼれている、日本の同級生と比べてはいくら頑張っても追いつかない」と、いつしか日本語ができない自分はできない自分と思うようになり、挑戦することや将来の進路に関して無気力となってしまったのだ。高校生になって「日本人のように話せるようになりたい」と必死に日本語を勉強していたら、「日本語上手ですね」と褒められるようになった。しかし、それが「外国人」として評価される私であった。この頃の私にとって、日本語というのは真の「ことば」ではなく、他者に認めてもらえる唯一の手段であった。

「日本語も中国語もできる」と他者に認めてもらえた自分の取り柄を生かしてできることをしたいという思いで、私は日本語教育を専攻として大学に進学した。そして、大学2年より中学生の時に通っていた放課後学習支援教室に戻り、後輩たちに日本語や教科の勉

強を教えるボランティア活動を始めた。中高生だった私と同じような思いを経験してもらいたくないという一心で、高校入試を目前とする中学生たちの日本語がはやく上達するように、教科の内容をはやく理解できるように、私は工夫しようとしていた。しかし、日本語が上手になることだけを目指しては、私が悩み苦しんでいた「外国につながる子ども」のライフに子どもたちを埋め込もうとしていたのではないか。そのような問題意識を持ち、私は早稲田大学大学院日本語教育研究科（以下、日研）に進学した。「これまでの既成の境界を越えて『移動』を経験する人々の生活を常態と捉え、流動する『ことば』と複言語・複文化能力を日常的に駆使して生きることを常態と捉える」（川上、2018、p.8）「移動とことば」の視座から、自身のライフをとらえ直し、実践を構築していくことを学んだ。

2. 複言語複文化間に生きるライフの視点に立つ実践を

筆者は、前述したように大学2年の時からある放課後学習支援教室にてボランティア活動を始め、日研在学期間中も実践を続けていた。その頃の筆者は教師と生徒、日本人と外国人、教える側と教えられる側などの「役割」のもと、日本語をどう教えるのかと試行錯誤していた。大学院における養成教育を受けながら実践を進めていく中で、その「役割」以前に、複言語複文化間で生きている自分自身はどのような経験をして、自分の「ことば」が生まれてきたのかと、このライフにおいて「主体」である自己を意識させられた。

筆者のような「移動」の中で成長する子ども・若者にとって、「ことば」の獲得は単なるスキルの習得ではなく、思いや感情、考えがともなう「ことば」が形成され、複言語複文化間で生きるそのライフの中で人として成長していくことだといえよう。川上（2011）では「空間」「言語間」「言語教育カテゴリー間」において移動する子どもへの実践について、かれらの「複数言語能力」や「複数言語使用の実態」、「複数言語を使用しながらどのように他者と関わりながら生活するのか」という「人としての生き方」につながる問題領域を提示された（p.25）。他者が囲んだ単一的な基準に照らし合わせるよりも、自身のもつ複数の言語文化資源と向き合い、複言語複文化間で生きるこのライフにおいて主体であることを意識し、「主体的な自己」を創出していける実践こそ必要なのではないか。細川（2006）で指摘されたような、「環境の影響を受けつつも能動的に自らが環境に関わり、働きかけ、相互交渉を通じて主体自身が認識することがその主体にとっての世界」（p.130）という視点に立って、筆者は複言語複文化間に生きる若者たちとともに、「主体的な自己」を創出していく実践を行った。本章では、実践のフィールドについて述べたうえで、実践の様子を示したい。

2.1 実践フィールドーなか国際交流ラウンジ

実践のフィールドである「なか国際交流ラウンジ」（以下、ラウンジ）は公益財団法人横浜市国際交流協会が行政による受託をうけ、横浜市内で運営する外国人住民向け施設である。外国人住民の日常生活を中心とする多言語情報の提供や日本語教室開催などの事業を実施するとともに、多様な地域社会の相互理解を深める取り組みを行っている。前述の放課後学習支援教室は、2009年より当ラウンジで開催され、横浜市中区内の公立中学校

に在籍する外国につながる生徒が中学校を經由して当教室に通っている。筆者は、その教室の一期生として在籍していた。当教室では、市民ボランティアによる一对一の学習支援が週一回行われるが、教室在籍の中学生や教室を卒業した高校生、大学生のうち誰かがほぼ毎日ラウンジを訪ねている。ラウンジのフリースペースで自習する子もいれば、友達と一緒に勉強しながらおしゃべりを楽しむ子もいる。そして、ラウンジにいるN先生と自分の話ができることを期待して訪ねてくる子がほとんどであった。当教室のコーディネーターとして長年運営に携わってきたN先生は、筆者を含む教室の生徒・卒業生が最も信頼できる存在で、学校の勉強から家庭のこと、恋愛の悩み、将来の進路まで何でも相談できる人である。中国出身の生徒たちにとって、中国出身のN先生と母語で話ができることは非常に気楽なことだが、何よりもN先生は生徒たちが感じる「モヤモヤ」を言葉にして整理してくれて、背中を押してくれる存在である。筆者は、当教室のボランティアとして活動を始めた際、他者に言われた「小さい頃から日本に来て、中国語も日本語もできていいね」という一言で「モヤモヤ」を感じていた。N先生とその気持ちを共有すると、「でも、今はラウンジでこれまでの苦労を経験として生かして、自分にしかできないことをしているね」と理解示してくれて、筆者は自分の感情を表現する言葉を見つけられた。「安心していられる場所」、「信頼できる大人がいる」「複言語複文化が承認される空間」それが筆者たちにとってのラウンジという場所であり、本稿の実践フィールドでもある。

このフィールドに、より多くの若者がそのような場所にアクセスし、主体的に学び、表現できるように、ラウンジそして横浜市中区役所のもとで「外国につながる若者支援プロジェクト」が2017年11月よりスタートした。教室を卒業した高校生・大学生を中心に運営委員会「にじいろ探険隊」が結成され、筆者はメンバーたちを取りまとめるコーディネーターをつとめた。外国につながる若者の居場所「Rainbowスペース」を立ち上げ企画運営を担いながら、自己表現活動や後輩である小中学生への学習支援、地域の一員として地域のイベント・活動などに積極的に関わった。

2.2 複言語複文化間に生きるそのライフの主体となっていく実践

ここでは、実践の主体である運営委員会「にじいろ探険隊」（以下は探険隊）について紹介したい。N先生に声をかけられ、「自分そして後輩のために居場所を立ち上げ、活動する運営委員会」に当初は筆者を含む8人のメンバーが集まった。「同じ苦労を後輩に経験させたくない」、「充実した高校生活を送りたい、何かを始めたい」、「なんとなくみんなと一緒にいて楽しい」など様々な思いをもって活動に関わるようになったが、一人ひとりがこの実践の主体であり、自身の複言語複文化間に生きるそのライフの主体である。その後、2018年に15人になり、現在は16人となった。中には、ラウンジの教室を卒業して高校生になってすぐに委員会に参加した人もいれば、探険隊が企画した活動に参加したことがきっかけでメンバーになった人もいる。

探険隊のメンバーたちは常に、複言語複文化間に生きる自分自身と向き合い、話し合いを重ねてきた。活動が始まった頃、メンバーたちは「日本」を「広くて先の見えない海」だと表現し、自分たちはどこに向かって進んでいたらいいのかわからず、助けてくれる人もいない「ぽつんと海に浮かぶ一人舟」だが、波に押されて「不本意な漂流」をしてい

ると言っていた。しかし、活動が始まって、「どんな活動をしてみたいのか」「私たちはどんな居場所、どんな支えを必要としているのか」「本当はどう思っているのか」と問うようになり、それまでの「漂流」を改め、「したいこと」「なりたい自分」を求め進めていく「探険」に変わった。「安心できる居場所」「学びたい・知りたいをつなげる空間」「自分の可能性に気づき表現できる場所」を目標に、メンバーたちは運営委員会を「にじいろ探険隊」と名付けし、居場所「Rainbowスペース」を立ち上げたのである。

そして、2019年、メンバーたちは自分たちのストーリーを脚本にまとめ、自ら出演・撮影し「向陽而生～私らしく生きること～」という映画を制作した。「外国につながる子ども」として生きてきた自分自身の悩みやモヤモヤを振り返り、「日本にくるのが『宿命』だとしたら、この先は『自らの運命』をひらいていきたい」という大きなメッセージを伝えようとした。その中には、思いや感情、考えがともなう「ことば」が生まれ、育っていた。その「ことば」を他者にどう伝えていくのかと、メンバーたちは自分自身もつ言語資源に磨きをかけた。そこには、押されて進む「一人舟」の姿はなく、目標を達成するために能動的に努力していき、自ら世界をひらいていく若者たちがいた。

本稿で考察したいのは、この運営委員会の活動である。メンバーたちはこの実践の中で自身のもつ複数の言語文化資源と向き合い、思いや感情、考えをともなう自分の「ことば」を見つけ、表現しようとしている。そして同じく複言語複文化間に生き、成長してきた筆者は、この実践において「主体的な自己」を創出していく一人でありながら、若者たちの「ことば」を導き、支える実践者でもあった。筆者を含む実践における変容を読み解き、複言語複文化間に生きる若者が「主体的自己」を創出していくその過程においてどのような視点そして支えが必要なのか、この実践の考察としたい。

3. 実践を通して学んだこと

実践の中において、実は最も成長したのが筆者自身であった。同じく複言語複文化間に生きる一人として、筆者はそれまでのライフで多くの「モヤモヤ」を残していた。「なぜ自分は日本に来て、こんな苦労をしないといけないのか」、「外国人」として見られる自分への悲観的な評価、「日本語も中国語も中途半端な自分」など、複言語複文化間に生きる自分を評価できずに、このライフにおいて「主体」であることも意識していなかった。実践の中で、同じ境遇にいる若者たちに出会い、かれらをより良い方向へと導いていきたいとそれまでの「苦労」を咀嚼し、振り返ることをしていたら、実はそれが筆者自身にしかない「経験」だと気づき、自分自身を肯定することができた。「言語しか自分に取り柄がない」という思いを改め、筆者は自分だからこそできることをしていきたいという「自分らしさ」を求め、主体的に進めた。それがこの実践にいる若者たちが、主体的に向かっている方向でもある。実践者にとっての「言語教育実践」は、複言語複文化間に生きる若者たちにとってはそのライフである。

故に、複言語複文化間に生きる若者が「主体的自己」を創出していくその過程において必要な支えとして、①かれらの複言語複文化を承認し、自己表出のできる空間・環境を構築すること、②かれらが複言語複文化間に生きるそのライフの主体であることを支援者が

認識し、そしてかれら自身も意識すること、③固定した基準規範では評価できない、思いや感情、考えがともなう「ことば」の創出を支えること、の3つをあげたい。

4. 専門家教育と実践の結びつきについて

川上(2020)で指摘されたように、「幼少期より複数言語環境で成長する子どもの個別で動的で複合的な『ことば』を捉え、総合的な『ことばの教育』を行う専門的な教員」の育成が求められている(p.39)。その教員とは、「子どもが複数言語環境に生きることを理解し、多様な言語資源を活用して日々のコミュニケーション活動を行い、『移動する子ども』という経験と記憶と向き合いながら成長する子どもの生を捉えられる」教員という。筆者自身の実践観の変容をたどっていくと、まさにそのような養成教育を受けながら、実践者として成長してきたといえよう。日本語をどうやって効率的に教え込もうとしていた筆者は、実践者として関わる自身の観点を自省してはじめて、目の前にいる子ども・若者たちの姿が見えてきた。そして、「教師」と「学習者」などの役割に縛られた固定的な観点から脱し、実践の中で双方が向き合いながらともに変化し成長していくことこそ重要だと意識させられた。地域の中で実践を行う筆者は「家庭」「学校」「地域社会」などの多角的な視点及び「過去」「現在」「将来」の時間軸から子ども・若者を捉えていく力が求められている。筆者は役割以前に、同じ人間として一人ひとりの子ども・若者の生と向き合い、関わっていた。その中でかれらと学び合い、自身を養成していた。その視点転換により、筆者は実践の中で自身を磨き上げていくことができた。このように、養成と実践の両者は修了前後の関係ではなく、常に相互に力を注ぎ合う関係にあり、その両者から自身を成長させていける力こそ、一人の専門家として欠かせない力と考える。

参考文献

- 川上郁雄(2011)『『移動する子どもたち』のことばの教育学』くろしお出版
 川上郁雄(2018)「なぜ『移動とことば』なのか」川上郁雄・三宅和子・岩崎典子(編)『移動とことば』序章、くろしお出版、pp.11-14
 川上郁雄(2020)『『ことばの力』と『ことばの教育』子どもの日本語教育のあり方を問う』『リテラシーズ』23、くろしお出版、pp.33-40
 細川英雄(2006)「日本語教育における知の構築—学習者主体とその実践研究への試み—」宮崎里司編著・川上郁雄・細川英雄著『新時代の日本語教育をめざして—早稲田から世界へ発信』明治書院、pp.124-140

(りん きんえん なか国際交流ラウンジ)